

〔課題演習抄録〕

道徳科における質の高い多様な指導方法の研究
-自我関与が中心の学習に着目して-

小林 昌子
Shoko KOBAYASHI

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：特別の教科 道徳，質の高い多様な指導方法，自我関与，道徳ノート

3 研究の内容

1 研究の目的

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議での「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等についての報告(2016)によると、これまで学校や児童生徒の実態などに基づき道徳教育の重点目標を設定し、充実した指導を重ね、確固たる成果を上げている学校がある一方で、例えば、歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること、他教科に比べて軽んじられていること、主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏った形式的な指導が行われる例があることなど、多くの課題が指摘されている。

このような状況を踏まえ、道徳教育の質的転換に向けて、専門家会議で示された指導方法を実践することが必要であると考えた。そこで、本研究では、専門家会議で示された指導方法(①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習②問題解決的な学習③体験的な学習)の中から小中学校で最も取り上げられる頻度の高い自我関与が中心の学習に着目し、質の高い指導方法につなぐことを目的としている。

2 研究の計画

平成 30 年 4 月～5 月	生徒の実態把握 実践授業Ⅰの教材研究
平成 30 年 6 月	実践授業Ⅰ
平成 30 年 7 月～8 月	実践授業Ⅰの分析
平成 30 年 9 月～10 月	実践授業Ⅱの教材研究
平成 30 年 11 月	実践授業Ⅱ
平成 30 年 12 月	実践授業Ⅱの分析

(1) 実践授業Ⅰ

実習校において、事前アンケートの結果が高い項目である「思いやり、感謝」で授業を行い、生徒の発言や記述から生徒の授業を分析した。実践内容は以下の通りである。

実践時期	平成 30 年 6 月 20 日 (全 1 時間)
対象	中学校 1 年生 1 クラス (全 41 名)
内容項目	B-(6)思いやり、感謝
教材	思いやりの日々 (東京書籍)
ねらい	事前アンケートの子どもが回答した事例の思いやりと読み物教材である「思いやりの日々」の和也さんと由美子さんの思いやりを分析し、それぞれの立場の思いやりを通して、思いやりには様々な考え方があり、思いやりの大切さや自分にとって思いやりとはどのようなことであるかを再度考えさせたい。

事前アンケートの結果から生徒は、友達や周りの人に対する思いやりが大切であるということは理解している。しかし、授業を通して単に思いやりが大切であることだけでなく、相手の立場や気持ちに対する配慮、実際に発した言葉と自分からは見えない相手の気持ちの矛盾などについても理解を深める必要があると考え、自我関与に関する発問とノートの工夫を用いて実践した。

まず、導入で思いやりの質の違いを考えさせるために、「席を譲る時のやりとり」と「英語の勉強中に手が止まっている人に教えている時のやりとり」の例を示し、親切をした側とされた側の気持ちについて個々で考えさせた。

次に展開では、読み物教材「思いやりの日々」を範読し、登場人物である和也さんと由美子さん夫婦の気持ちを個々で考えさせ、自分が考える思いやりとこの夫婦の思いやりの違いはあるだろうかという発問から思いやりの違いを比較させた。

そして、主発問の「思いやりって何だろう」という発問から再度思いやりに対する考えを再構築させた。最後に終末では今日学んだことを今後の学校生活でどのように生かすのかを考えさせ、授業のまとめとした。

授業後の生徒の道徳ノートには、「困っている人がいたら、声をかけてあげて声をかけるだけでなく、見守ることも大切だと思った」や「思いやりは人を嬉しくさせるものでもあるし、悲しくさせてしまうものでもある。だから、今相手はどう思っているかを考えて思いやるのが大切だと思う」という記述が見られた。

(2) 実践授業Ⅱ

実習校において、事前アンケートの結果が低い項目である「社会参画」で授業を行い、生徒の発言や記述から生徒の授業を分析した。実践内容は以下の通りである。

実践時期	平成30年11月27日(全1時間)
対象	中学校1年生1クラス(全42名)
内容項目	C-(12)社会参画
教材	自作資料(河北新報2018年3月9日より)
ねらい	震災後7年も継続して支援を続けている人の新聞記事を読み、ボランティアをするために大切な心について考えさせたい。また、ボランティアに対する考えを広げるために、ちょボラを紹介し、中学生である自分たちにできることは何かを考えさせたい。

5月に行った事前アンケートの結果から、社会参画の項目に対する肯定的回答は70%であり、郷土愛に次いで低い結果であった。そこで、本時の授業を通して、中学生である自分たちも社会の一員として生きていることを自覚させ、社会の一員として参画することの大切さに気づかせたい。

導入では、今までのボランティアの経験を聞き、身近なところにあるボランティアを紹介した。その後、めあてを提示し、震災が起こった後も継続してボランティアを続けているサンドウィッチマンの新聞記事を範読し、これまでの活動内容を整理した。

展開では、サンドウィッチマンの記事から2人が震災から7年経った今でもボランティアを続けている理由について考えさせた。また、「途中で辞めようと思ったことはないだろうか」と問い、ボランティアの意義、人間としての理解や葛藤について深く考えさせた。その後、ボランティアに対する考えの幅を広げるために、「ボランティア活動は震災の時のみ行われていることだろうか」「被災した場所のみで行うことができないのだから

か」と発問し、実生活の中で取り組める「ちょボラ」を紹介した。

終末では、自分たちが取り組むことのできるちょボラについて個人で考えさせた後、班で意見交流をし、発表させた。最後に、教師の説話として、自分たちを取り巻く社会は様々存在し、学級、学校、地域それぞれでできることを考えて生活してほしいという思いを伝え、今後社会を担って、未来をつくるのは中学生である自分たちであるということを目覚めさせ、授業のまとめとした。

授業後の生徒の道徳ノートには、「ボランティアをするためには誰かの役に立ちたいや、やってみたいという気持ちが大切で、私もボランティアをして誰かのために動いてみたいと思ったので小さなことから始めたい」や「他人事として考えるのではなく、自分も一緒になって考えて、ボランティアをして助け合うのが大切だと思った」という記述が見られた。

4 成果と課題

- 生徒のノートや記述、発言から、様々な立場や角度から内容項目について考えていることがわかった。
- グループでの話し合いの場面を設けることで、他者の意見も聞くことができ、内容項目に対する意見が深まっていた。
- 道徳ノートに関しては、吹き出しや意見の対比がわかるように工夫をしたことで、子どもの考えが明確化された。
- 自作教材を用いて行うことで、子どもの授業に対する興味や関心を引き出すことができた。
- 導入での工夫として、興味や関心のある資料の提示は効果的であった。
- 話し合い活動での課題として、発問によっては自分の意見を優先して発表させることが必要だった。
- 主発問に対して、問い返しが不足していたので生徒の意見を十分に拾えない部分があった。
- 終末の教師の説話によっては、授業のねらいが左右されることもあるため、終末の工夫や改善が必要だった。

主な引用・参考文献

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議 2016

「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告)

文部科学省 2016 中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳